

緊急インタビュー

谷口健JPBA会長に聞く プロボウリングの未来

「われわれはまだマイナーな存在。
“継続は力なり”は正論だが、
時代に即して変化していかなければ、継続もできない」



3月24日、大阪・四ツ橋筋本町の「割烹 けま甚」にて取材

新シーズン開幕の「WOMEN'S ALL★STAR GAME2020」。“3冠女王” 姫路麗と20歳の気鋭・坂本かやの迫真の頂上決戦で華々しいスタートを切ったプロボウリング界だが、新型コロナウイルスという“見えない敵”の出現によって一気に暗転してしまった。

先行きがまったく見えない未曾有の状況下で舵取り役を担う谷口健 JPBA会長は今、何を思う—!?

中止の2大会は 実質“延期”

—新型コロナウイルスの感染拡大で、業界を超えて話題を集めていたトーナメントが相次いで中止となってしまいました。

谷口 「KUWATA CUP」も住建ハウジングの「CHAMPIONS CUP」も、今年上半期の目玉だったので残念です。2月の「スポンサー感謝の集い」のときは、まさかこんな事態になるとは思ってもいませんでした。主催者もテレビクルーも広告代理店も、それにわれわれプロ協会も含めて、本当に綿密な準備してきたのに、それがこういう「天災に殉じる」ような状況になってしまって…。国を代表する人たちのなかには「これは戦争だ」と言っている人もいますが、今はまさしくそんな事態ですからね。

ね。開催を強行して、万が一にでも感染者を出してしまったら世間に多大な迷惑をかけることになるので、現状では慎重にならざるを得ません。2大会ともいったん中止としましたが、われわれもスポンサーサイドも、状況を見極めて開催の時期を模索していく意向で、実質的には“延期”です。

—7月には大阪のポウルアロー松原店で女子の新設大会（大岡産業レディースオープン）が予定されていますね。

谷口 ええ。そのころには何とか事態も収束してほしいものです。

—今は全国各地のボウリング場も、団体客を中心にキャンセルが相次いで大変な状況だと聞きます。

谷口 そうなんです。例年3月、4月のこの時期は、全国的に子供会や学校の行事で利用していただくことも多いのですが、今はそれも制限されていて、どこのボウリング場も経営的に厳しい状況だと思っています。

—ボウリング場が感染リスクの高い場所だという先入観を持たれると厄介ですね。

谷口 ボクもボウリング場の経営に携わっているのですが、今はお客さんの健康意識も高まって、ちょっとでも危ないと思われると足を運んでもらえなくなります。そのあたりは経営者が自覚を持って取り組んでいかな

と。4月1日から改正健康増進法が全面施行されて、すべてのボウリング場で喫煙室の設置が必要になりましたが、それも世界的に見れば、日本が先進国のなかでいちばん遅れているんですからね。

—ちなみにJBO（日本ボウリング機構）では、何か対策を講じているのでしょうか。

谷口 近々会合の予定だったのですが、流れてしまいました。JBOも業界挙げての組織として、いずれ何かしらの発信をしていく必要があると思いますが、今は各団体が置かれている立場に少しずつ違いがあって、各々で対応している状況です。

さらなる ビッグプランも

—話は変わりますが、ここ数年、プロボウリング界はハード、ソフトの両面で時代に即した変革の気運が加速してきたように感じます。

谷口 そうでもないですよ。先日の総会でも理事のみなさんに言ったのですが、世間的に見ればわれわれはまだマイナーな存在です。改革の必要性に関しては、みなさん総論は賛成でも、各論になると自分の都合ばかり言いだしてなかなかまとまらない(苦笑)。

—そうなんですか。

谷口 たくさん賞金を稼いで、大勢の人の注目を浴びてこそプロ、というのがボクの持論。言葉で「改革、改革」と叫んでも、実際にそれを要望したときには、異論がたくさん出てくる。でも、そこで何もしなかったらマイナーなまま。新しいことにトライしたり、新しいアイデアを出してくる人の意見に耳を傾けて取り込んでいく必要がある。そのあたりは指導力を持ってやっていきたいですし、ボク自身も「各論反対」の人に理解してもらおう努力が必要でしょうね。

—議論の場では皆が忌憚なく

意見を出し合い、決まったことには従って、同じ方向を向いて取り組んでいくというのが理想ですね。

谷口 その通り。そうしていくべきです。「継続は力なり」というのは正論ですが、時代に即して変化していかなければ、継続もできないですから。

—4年前の会長就任時に掲げていた「新規トーナメントの開発」という目標は、順調に達成されてきました。以前のようにボウリング場協会頼みではなく、業界外に支援の輪が広がってきたのもうれしいですね。

谷口 業界外からサポートをいただくというのが、プロの本来あるべき姿だと思います。実際、運営費を上回る賞金総額の大会でないと、大半のプロは経費倒れしてしまう。以前に、ボクがSNKというスポンサーを引っ張ってきたときも…。

—「ネオジオカップ」ですね。

谷口 そうです。優勝賞金は、男子が1000万、女子は800万。それまで「プロとしての真剣さに欠ける選手が多い」というお叱りを各方面から

いただいていたのに、ネオジオではみんな目の色が変わりましたから(笑)。

—ネオジオで思い出しましたが、会長は「第1回ジャパンカップ」の覇者でしたね。

谷口 ジャパンカップの優勝賞金は250万くらいでしたが、あの大会は「出られるだけでステータスだ」と、PBAの連中も言っていました。これからもそんなトーナメントを作っていきたいですね。

—会長がそれだけ前向きだとホッとします。

谷口 前を向いておかないとしょうがないでしょう(苦笑)。

先行き楽観視はできませんが、今のこの状況を「充電期間を与えられた」と思って、みなさんの期待に沿えるように頑張っていきたい。実は今年から始動させるつもりだったビッグプランもあるのですが、コロナ騒動で動けなくなってしまったこの期間に、もう少し細部を煮詰めていって、収束のあかつきには大々的に発表したいと思っています。

—谷口会長の指名で副会長に就任した姫路プロも頑張っていますね。

谷口 彼女は志が高いですよ。自分の利益のためではなく業界全体のために、という気持ちを持って活動してくれています。



▲「スポンサー感謝の集い」の席上で行われた3冠表彰。現役プロとしても副会長としても、姫路に対する谷口会長の期待は大きい(2月4日、ジョエル・ロブション恵比寿ガーデンプレイス店)

—それは素晴らしい!

谷口 選手としての実力も実績も申し分ないし、ベテランの大御所にも若いプロにも好かれている。今すぐに大きな責任を負わせるのは可哀想だけど、将来のリーダーとして、ボク個人は大いに期待しています。

たにくち・たけし / 本名同じ。1954年7月3日生まれ、大阪府出身。血液型B。174cm78kg、右投げ。73年デビューのJPBA11期生(ライセンスNo.346)。公式戦優勝8回(85年第1回ジャパンカップ覇者)。2017年より(公社)日本プロボウリング協会会長(現在2期目)。



▲住建ハウジングプレゼンツ「CHAMPIONS CUP」の記者発表会で挨拶する谷口会長。(2月6日、TEPIA先端技術館)

—ウイルスという“見えない敵”が相手だけに、もどかしいですね。

谷口 ワクチンひとつできれば状況も変わるんでしょけど